

# 看護専門科目「援助的人間関係論」における取り組み

— SP (模擬患者) 参加型授業実践の評価 —

大野 夏代 藤井 瑞恵 樋之津 淳子  
三上 智子 鶴木 恭子 小坂 美智代

札幌市立大学看護学部

**抄録：**看護専門科目（必修）としての「援助的人間関係論」の授業に、SP（模擬患者）参加型演習を取り入れて行った。本科目を履修した学生のうち調査に同意の得られた34名（42%）と、授業に参加したSP7名（100%）を対象に質問紙による調査を行ったところ、本科目全体について学生は、29名の学生（85%）が「とても」あるいは「まあまあ有意義であった」と感じていることがわかった。また、SP参加型演習に対する取り組みに関しての学生の自己評価も、34名中33名の学生が、「関心を持って取り組むことができた」「まあまあ関心を持って取り組むことができた」と自己評価しており、態度の変容を期待させた。授業運営に関しては、①多数の学生が見ているところで演じることによる緊張の低減、②より多くの学生がSPとのセッションを体験できるような授業運営の工夫、③学習を促進するためのよりリアルな設定、④シナリオの工夫、⑤コミュニケーションスキル練習の強化、⑥SPとの関係づくりの充実、⑦コミュニケーションのプロセスが学習しやすいレポートの書式の工夫、⑧SPと学生のセッションにおけるファシリテータとしての役割を含む教員の教育能力の改善、これらの課題が明らかになった。

**キーワード：**援助的人間関係、コミュニケーション、模擬患者（Simulated Patient）、看護学部教育、演習評価

## I. 緒言

コミュニケーションは、看護教育においては従前より高い関心が持たれており、多くの報告がある。例えば、2008年10月、学術文献データベース医学中央雑誌の看護分野（2003年～2008年）で、「コミュニケーション」をキーワードに検索すると8044件の該当があり、「コミュニケーション」and「看護学生」and「人間関係」であっても、570件の報告が検出される。

看護基礎教育においては、学生のコミュニケーション能力を育成するための様々な試みが発表されている。その一つが、医学教育を参考に模擬患者（Simulated Patient、以下SPと略す）を活用したSP参加型コミュニケーション学習であり、適度な緊張感のある学習環境を作り出し、コミュニケーション技術と態度の学習に効果的であることが、尺度や記録物の分析から確認されている<sup>1)~9)</sup>。この授業方法の利点は、一般的かつ臨場感のある看護場面を作り出すことができ、何度でも繰り返し討議することができる、本物の患者に害が及ばない、などである<sup>10)</sup>。看護教育に協力したSPによる、貴重な意見の報告もあった<sup>11)</sup>。

これらコミュニケーション演習のカリキュラム上の位

置づけは、「看護技術論」「臨床看護論」など、演習科目の一部<sup>12)</sup>、精神看護学の講義<sup>13)</sup>、学科共通科目としての専門科目<sup>14)</sup>の他、「仲間づくり演習」など人間関係形成を目的として入学直後に特に設定した演習<sup>15)</sup>、実習オリエンテーションの機会の利用<sup>16)</sup>や実習前演習<sup>17)</sup>などである。

S大学看護学部では、平成19年度に専門科目「援助的人間関係論」（2年後期必修）を実施した。これまでのところ専門科目としてのコミュニケーションの演習についての報告は、エンカウンター・グループに関する4年次の選択履修としての1件のみであり<sup>18)</sup>、S大学の「援助的人間関係論」のように、人間関係形成やコミュニケーションについて学ぶことを目的として設定された科目の報告は見当たらなかった。

平成21年度入学生より適用される新カリキュラムでは、専門分野Iの基礎看護学において、「コミュニケーションを強化する内容とする」とあり、看護の専門科目としてコミュニケーションに取り組むことの必要性が明確に示された。これにより、それまでは看護の専門に入る前の基礎科目で学習されていた内容に加え、専門分野でも学ぶことになる。従って今後は、S大学の「援助的人間関係論」のような科目が、全国の看護師養成機関で配置される可能性がある。

平成 19 年度の授業実施後、受講した学生の一部及び参加した SP より授業に関する評価を得た。本稿では、これらを中心に授業運営を振り返り、自分たちのよりよい授業実践のための課題を整理することを目的とするが、S 大学の取り組みが少しでも他の教育機関の参考になることも期待している。

## II. 研究方法

### 1. 調査対象

本科目を履修した S 大学看護学部 2 年生 81 名のうち、調査に同意の得られた 34 名 (42%)、及び、授業に参加した SP のうち同意の得られた 7 名 (100%)。

### 2. 調査期間

平成 19 年 12 月～平成 20 年 2 月

### 3. 調査内容

学生には、科目の満足度、演習に対する取り組み、科目の目標到達の自己評価、その他の自由記述を、質問紙により調査した。また、SP には、「今回の授業の模擬患者役で難しかったこと」「学生の態度で気になったこと」「教員の態度や設営で気になったこと」及びその他の自由記述を、郵送で調査を依頼し全員より回答を得た。

### 4. 倫理的配慮

学生と SP には、調査の目的と方法を文書及び口頭で説明し、同意する場合に質問紙（無記名）の提出を求めた。学生には、調査への協力の有無は成績に影響がないことを説明した。また本研究は、平成 19 年度の札幌市立大学研究倫理審査委員会の承認を得た。

## III. 授業計画

### 1. カリキュラムの特徴と科目の位置づけ

S 大学の理念は、「人間重視を根幹とした人材の育成」と「地域社会への積極的な貢献」である。看護学部の教育目的は表 1 の通りであり、「人間性を尊重した対人関係形成能力を備えた人材の育成」はそのひとつである。

コミュニケーション教育の目的は、一般的にはコミュ

表 1 看護学部の教育目的

- 的確な実践力を有する人材の育成
- 人間性を尊重した対人関係形成能力を備えた人材の育成
- 地域社会に貢献できる人材の育成

ニケーションに関する知識・技術・態度の修得である。しかし、専門科目である「援助的人間関係論」という名称の本科目は、新カリキュラムの専門分野 I にほぼ該当する「看護の基盤となるもの」という科目群にある演習科目であるので、ここでは、知識の習得だけでなく、援助者として必要なコミュニケーションの技術と態度を養うことが特に期待されると考えられる。

尚、他学部学生と共に学ぶ共通教育科目には、「対人コミュニケーション」「基礎カウンセリング」の科目が配置されており、看護学部学生の多くは、1 年次に選択し履修している。

### 2. 科目の位置づけとキーワード

科目のねらいを表 2 に示す。今回の授業の科目配置は 2 年後期であり、対象者は、必修科目であるので看護学部 2 年生 81 名全員である。科目の担当者 6 名は、全員が看護教員であった。

学生は 2 年前期の基礎看護学臨地実習 II において患者を受け持つ実習を体験しており、また本授業は途中で成人看護学臨地実習 I を間に挟む日程であったので、看護師としての対象者とのコミュニケーションについては、ある程度の動機付けがあると推察された。

この授業を計画するとき大切にしたのは、学生一人ひとりが援助的人間関係の形成を自分の課題としてとらえ、人間関係を発展させたり、関係形成を阻害したりするコミュニケーションを体験し、患者－看護師関係のプロセスを感じたり考えたりする機会とすることであった。そしてそれにより、援助的人間関係の形成に向けて建設的な態度が育成されることをねらいとした。その実現に向けて、演習の方法等について、担当者で検討を重ねた。

「ねらい」の意図を受けて、キーワードはまず、「自己理解」と「他者理解」と決まった。「ケアを受ける人」は、看護師にとっては他者である。「ケアを受ける人がどう

表 2 「援助的人間関係論」のねらい

看護の基本となる対象との援助的人間関係の形成について理解を深めると共に、コミュニケーションの理論と技術を習得する。また、受容共感や自己の対応パターンを確認し、信頼関係を確立して自己と他者との関係が成立することによって援助が可能となることを学ぶ。

思っているかを知ること」(他者理解)のための道具は、「自己のこころ」である。他者の心の状態として推察されている内容は、自己の脳内で生じていることであり、その内容を理解するのも自己である。したがって、看護師が、患者である他者を理解し、援助を目的とする人間関係を築く場合には、「自己のこころ」という道具を自分が用いていることを意識する必要がある。看護基礎教育における「人間関係・コミュニケーション」教育の内容としては、「自己理解・他者理解・人間理解」が欠かせないという見解もあり<sup>19)</sup>、人は自分を理解するようにしか他者を理解することはできないという考え方にに基づき、人間関係の基本的な要素として「自分を理解する」とことと「他者を理解する」ことを主要な内容と考えた。

また、一般的に対人関係において他者との葛藤は避けられない。医療場面でも様々な価値観や異なる意見を持つ人々との相互作用がある。看護者も患者も自分自身の欲求や目標をもつ独自の存在であり、その欲求・目的達成のために他者や社会に働きかけている。その中では様々な問題について意見の不一致や利害の対立を経験することになる。そこで対人葛藤を理解し、それを効果的に解決するための対処法を学ぶことは、援助的人間関係の形成において重要な意味をもつと考え、「葛藤」をキーワードのひとつに選定した。

「自己一致」とは、自己概念と自己経験が一致している状態である。人は常に新しい経験をし、予期せぬ事態や経験により新しい自分を発見して自己概念に取り入れ、修正している。他者との関わりの中で自己概念に一致している経験は自己概念に組み入れられ強化されるが、自己概念と一致しない経験は自己の経験として認めることができなかつたり、自己の経験と一致するように歪めて解釈したり、自己概念に一致する経験だけを選択して知覚する<sup>20)</sup>。このような自己不一致の状態が長く続くと自己概念だけが強固になり、他者との関係を深めることが困難になる。心理療法の場では、セラピストの自己一致が、クライアントの自己不一致から自己一致状態へと変化を促し、治療効果をもたらすための必要条件とされて

いる。看護場面では心理療法を実施するわけではないが、どのような対人関係場面でも、対象者との良好な関係を形成するには自己一致を意識することが基本であると考えキーワードに選定した。

以上により、キーワードは、「自己理解」「他者理解」「葛藤」「自己一致」の4つとし、科目目標は表3の通りとした。

### 3. 模擬患者参加型授業について

この科目では、SPに協力を依頼する授業運営を検討した。前述のように、専門科目として行っている授業運営の資料が少なく、また担当者には事例作成の技術があるとは言えず、新設大学であるため授業へのSP導入のノウハウも乏しい中、科目担当者に不安はあったが、報告されている効果と有用性の大きさに圧倒的な魅力を感じ、SPを依頼することとした。

今回依頼したSPは、模擬患者としての訓練を受けている「COML札幌患者塾」のメンバーで、外来診療の問診や客観的臨床能力試験(Objective Structured Clinical Examination: OSCE)など、主に医学生への協力実績のある健康な市民である。今回の演習には40から60歳代の女性7名の協力を得た。

## IV. 授業の実際

### 1. 科目「援助的人間関係論」の構成と授業展開

この科目は1単位15回であり、原則として2講連続(90分×2回)で実施した。構成を表4に示す。第1回と第2回を授業の導入と位置づけ、第3回から第8回までを演習1としSPの協力を依頼した演習とした。第9回には「臨床現場における共感的理解の実際」というテーマで、看護実践の現場で活躍中の方に講演を依頼した。第9回と第10回の間には、3週間の成人看護学臨地実習Iがあったので、第10回以降を演習2とした。

表3 「援助的人間関係論」の科目目標

<p>一般教育目標 (GIO)</p> <p>多様な対象に対する看護を行うために、援助的な関係を形成していくための技術を学ぶ。</p> <p>特定行動目標 (SBO)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 自己概念を再構築し、対人関係形成における自己の傾向に気付くことができる。</li> <li>2. 援助者として、聴く・伝えることができる。</li> <li>3. 相手を受容し傾聴する体験ができる。</li> <li>4. 援助的人間関係を形成するために、意図的に関わるすることができる。</li> </ol>
---

表4 科目の構成と授業展開

回数	項目
1	オリエンテーション, 援助的人間関係とは
2	グループワーク「私の名刺」
3, 4	演習1: SP参加型授業-①自己概念(体重の増えすぎた妊婦)
5, 6	演習1: SP参加型授業-②他者理解(入院を告げられた主婦)
7, 8	演習1: SP参加型授業-③葛藤, 自己一致(看護学生の悩み)
9	講演: 臨床現場における共感的理解の実際 (成人看護学臨地実習I)
10, 11	演習2: 実習での体験(グループワーク)
12, 13	演習2: 実習での体験(グループワークと発表)
14, 15	演習2: 実習での体験(全体発表とまとめ)

## 2. 演習1 (SP参加型授業) について

演習1のねらいは、SPを対象としたコミュニケーションを経験し、キーワードについて体験的に理解することとした。授業運営を、図1に示す。演習1は、キーワードごとに3回行った。

学生27名ずつを3つの教室に分け、それぞれの教室にSP1名と教員2名を配置した。図1におけるSTEP2の教員とSPとで示す対話は、モデルとなるような模範的なものではなく、言語的・非言語的なコミュニケーションの問題点がわかりやすいものとし、学生が考える材料となるよう工夫した。

各グループ4～5人の学生で、事例のコミュニケーションについて、あらかじめ示された視点に基づきしばらく検討した後、SPが再登場し、冒頭の事例を演じる中で、患者としてどのように感じたかを話す。それらを踏

まえ、学生は、同じ場面をどのように改善できるかの検討を続け、グループ内でロールプレイングを行う。配役を交替し、グループ内では全員が看護師役を経験する。授業の後半では、数人の看護師役を選出し、グループで改善したコミュニケーションをSPを対象として実施し、フィードバックを得た。

事例は、担当教員が作成した。学生には、事例を読むことを事前学習として課した(資料1)。この他に、SPの「役づくり」用に患者の心境などの情報と、教員との対話の流れや演技のポイントを準備した。授業後の提出物は、自分が看護師のときの対話を中心として、気になったり重要だと思われる場面を抽出し、自分の感情や対象者の思いをどのようにとらえたかを、援助的人間関係の視点から会話と共に記述するレポートとした。

## 3. 演習2 (実習での体験) について

演習2のねらいは、実習中に遭遇した気がかりな場面やできごとについて振り返り、再構成することである。学生達は成人看護学臨地実習Iでの体験をプロセスレコードに記述し、第11回の授業に持参し、グループの他の学生に説明することとした。その際、個人的な体験を慎重に扱うため、事実の公開の程度や創作的改変は学生に任せた。

グループメンバーの事例の中から1つ以上を選択し、ロールプレイングで再現し、グループで検討する(これを再現ロールプレイングと呼ぶ)。グループで、4つのキーワードのうち、1つ以上を用いて解釈し、改善に向けてロールプレイングを行う(改善ロールプレイングと呼ぶ)。再現ロールプレイングと改善ロールプレイングを、ABCの各教室で発表した。ABC内で、科目の意図

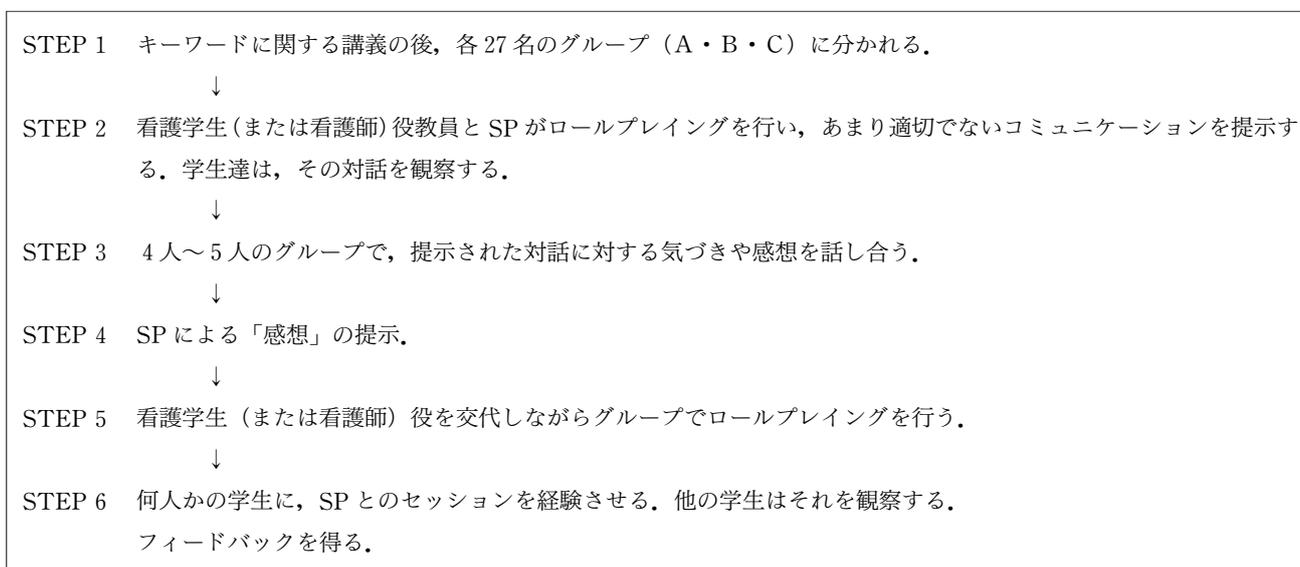


図1 演習1のプログラム

事例【葛藤】看護学生の悩み

単元の目標

1. 対人場面における葛藤状態を理解する
2. 葛藤へのいくつかの対処方法を考えることができる
3. 選択肢の中から葛藤への効果的な対処方法を選択することができる

背景

鎌田好子さん 66歳。心疾患で治療食（塩分・水分制限）を受けている患者。2週間の実習で学生（2年生）が受け持ちになる。シャキシャキとした性格で、同室者（4人部屋）でも何でも仕切るのが上手。学生にも気さくに色々なことを話しかけて実習しやすい雰囲気を作ってくれている。水分制限を本人は守っているつもりだが、現実には体重増加があり、心肥大も見られる。その点を医師・看護師から指摘されることを快く思っていない、時々学生に不満をもらしている。

場面

学生は、一週目の実習が終了し鎌田さんには終了の挨拶をしたが、看護師に来週の検査の確認をするよう指導され、再び病室を訪れた。鎌田さんは、病床のカーテンを半分引いて、ヨーグルトを食べていた。

学生：「鎌田さん、すみません。また来週と言ったのですが、月曜日の血液検査のことで確認に来ました。」

資料1 演習1の事例の一つ（学生用）

にあったと思われる代表2グループを選出し、第15回の授業で、再現ロールプレイングと改善ロールプレイングを全体の前で発表した。

4. 評価

評価は、出席状況、演習態度、レポートを総合的に行った。評価の対象となるレポートは、演習1・2のレポートの他、「この科目で、何を学び、どのような技術が身についたと思うか。また、既修の用語や概念を用いて、自分の考えや今後の自己の課題を述べなさい。」というものとした。

V. 結果及び考察

1. 学生の満足度

本科目全体についての学生の満足度は、「とても有意義

であった」4名、「まあまあ有意義であった」25名、「あまり有意義ではなかった」3名、「まったく有意義でなかった」2名であり、29名の学生（85%）が「とても」あるいは「まあまあ有意義であった」と感じていることがわかった。

また、取り組みに関しての学生の自己評価も、図2のように、演習1、2とも高かった。特に演習1に関しては、殆どの全員の学生が、「関心を持って取り組むことができた」「まあまあ関心を持って取り組むことができた」と自己評価している。また、表5の自由記述には、「SPさんが授業に来てくれてよかった」という感想が、素朴な表現で書かれており、実践に近い雰囲気を味わうことにより、取り組みへの意欲が引き出されたようである。実際の場合でも、SPとのセッションでは、よく聞こう、よく見よう、と身を乗り出している様子が観察され、学生の表情は真剣そのものであった。程よい緊張感は、教員と

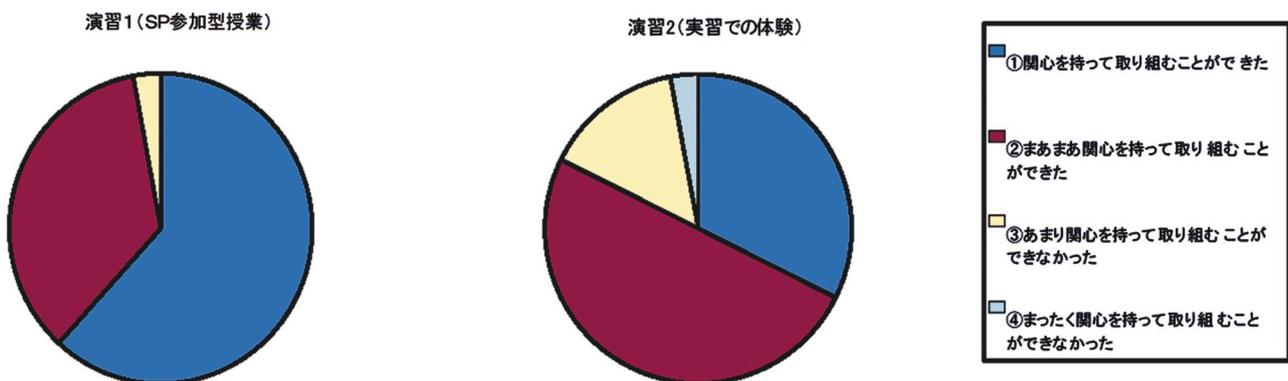


図2 演習に対する取り組みの自己評価

表5 授業の運営等に関する学生の自由記述（一部抜粋）

- ・時間の都合で少数の人しか経験できないのが残念だった。もっと多くの人が模擬患者さんとロールプレイングできたら良いと思いました。
- ・初対面で実践に近かったのでよかったです。実際の雰囲気を感じられました。
- ・SPさんがいることで、実践に近い雰囲気を味わえたと思います。とてもためになった。
- ・実践（実習）≫ SPさんとのロールプレイング≫ グループロールプレイング≫≫≫≫≫ 坐学（紙での事例）って感じです。
- ・SPさんの感想は、とても役立った。とても良かったと思います。
- ・患者さん、ひとりひとりで感じ方が全く違う。そういうことに気づけた。
- ・良い緊張感でできたと思う。意欲的に取り組めた。
- ・SPさんに来ていただき、実際にSPさんとロールプレイングをすることは大変貴重な経験となった。このような経験の機会を与えてくれた先生がた、SPさんに本当に感謝している。
- ・SPさんと発表した人は、特にその講義は印象的だったかもしれないが、それ以外は、手抜きをできるなあ、と感じた。
- ・実習で一番不安なのは患者さんとのコミュニケーションなので、この授業があつてよかった。
- ・「この人にこういうことを伝えたいが、どのように伝えるのが効果的か」ということを真剣に考え、そして実際にSPさんとのデモンストレーションを通して、より効果的な対応の仕方について考察できる機会が得られたので、本当に受講してよかったと思っています。
- ・「看護師」ではなく「看護学生」としての対応を考えられる機会があれば、もっとよかった。
- ・もう少し、概念（キーワード）についての説明が欲しかったです。
- ・先生が言ったように、コミュニケーションはすぐ上達するわけではないので、自分の成長があまり感じられなかった。
- ・コミュニケーションについて考えるきっかけにはなった。考えることに意義があると思います。
- ・1年次のコミュニケーション科目を必修にして、その後、この科目で実施のような形式だったらどうでしょう。1年次の科目も非常に勉強になりましたよ。
- ・演習1のレポートの書式は、決まっているほうが書きやすい。

学生だけの授業では到底得られなかったものであり、援助的人間関係の形成に向けた建設的な態度の伸長を期待させた（図3）。

## 2. 目標の到達

行動目標の達成に関する学生の自己評価は、表6のようであった。4項目の目標に対しては、項目により若干の差はあるが、多くの学生は、「概ね」または「まあまあ」達成しているとの自己評価が得られた。

学生のレポートからは、「援助的人間関係を形成するために意図的に関わるには、自己理解を深めることが第一である」と考える。自己理解ができなければ葛藤状態に

陥っている自分に気づくことも出来ず、自己一致にも至らないからである」「今までは『自己』について考えることがなかったが、この機会に看護師としての自分を見直し、思っていることを患者さんにしっかり伝えられているかに注意しながら接していきたい」などの記述があった。これまでは「自分について考えてこなかった」ことに気づき「自分を理解することの大切さ」を述べることでできている。また、「葛藤の解決方略を学習した。実際の場面では、状況や患者さんとの関係性が大きく影響するため、患者さんの視点を大切に、患者さんに誠実であろうとする思いを元に自分の言動を決めることになる」と記述され、葛藤を意識する場面でも、対象者や自



図3 SPと学生のセッション

表6 学生の評価 行動目標到達の自己評価 件数 (%)

	①概ね達成した	②まあまあ達成した	③あまりよく達成できなかった	④まったく達成できなかった
1. 自己概念を再構築し、対人関係形成における自己の傾向に気づくことができる	3 (8.8)	23 (67.6)	8 (23.5)	0 (0)
2. 援助者として聴く・伝えることができる	4 (11.8)	23 (67.6)	7 (20.6)	0 (0)
3. 相手を受容し傾聴する体験ができる	10 (29.4)	17 (50.0)	7 (20.6)	0 (0)
4. 援助的人間関係を形成するために、意図的に関わるができる	6 (17.6)	18 (52.9)	10 (29.4)	0 (0)

分の思いを大切に、意図的に関わりたいという気持ちが表現された。これらより、科目の目標の主要な部分は、概ね達成したと考えている。

今回の授業では、コミュニケーションスキルに終始しないような授業を心がけた。その結果、演習の体験により態度の変容に向けての手ごたえは感じたものの、「聴く」「伝える」に関するコミュニケーション技術については、練習不足の感が残った。今後は、主要概念の講義に若干多くの時間を配分すると同時に、スキルについても練習するような機会としたい。

### 3. 運営

#### 1) SP と学生のセッションについて

今回の演習1では、ABCのグループの人数は、それぞれ27名であった。この形式の演習の場合、代表者1名がSPを対象に実践を行い、それ以外の学生は、周囲で観察することになる。SPの意見(表7)にもあるように、多くの同僚学生に見られる中で演じる学生の心理的負担はどうしても大きくなる。また周囲で見ている学生にとっては、第三者として観察することによる学びを得ることはできるのだが、SPとの対話による緊張感は得られず、その結果、学習に対する動機付けを高めることは困難であった。

今回の調査では、SPとのセッションを数人ではなくより多くの学生が体験することへの希望が、学生からもSPからも確認された。担当教員の人数や使用できる教室の数による制限はあるが、ひとつのグループの人数を少なくすることによる学習環境の改善を検討したい。

#### 2) 事例やファシリテーションについて

SPには、毎回2週間前には電子メールによる通信で事例を渡した。担当教員全員とSPとの演技に関する打ち合わせは、当日の授業前20分間で行った。ベテランのSPによる演技は素晴らしく、事例の人物が置かれた状況や心境が表現され、身震いするほどのリアリティを感じた。また、学生へのフィードバックは、科目や単元の意図に沿ったものであった。授業担当者としては演技とフィードバックの質は十分であったと評価したが、SP

からの意見では、もう少し事前の調整が必要であったようである。また、SPからの指摘があったように、事例の年齢や体格を、参加するSPに近いものとする、リアリティを更に高めることが出来たと思われる。

授業では、SPと学生のセッションについては、教員がファシリテータの役割を担った。ファシリテータは、セッションの進行役で、個人やグループに内在する成長への力を引き出す役割を持つ。看護師学生がSPのフィードバックを受け入れるのを援助しつつ、グループ全体の教育効果を促進させる。担当教員は、SP参加型教育に関するFD研修を受講してはいるが、ファシリテータとしての役割が十分に機能していたかどうかは、今回の調査では確認していない。

## VI. 結語

以上、平成19年度の教育実践より、以下の課題が明らかになった。

1. より多くの学生がSPとのセッションを体験できるような授業運営の工夫
2. 多数の学生が見ているところで演じることによる緊張の低減
3. 学習を促進するためのよりリアルな設定(学生のユニフォーム着用等)
4. シナリオの工夫(参加予定のSPに適した設定、「看護師」ではなく「看護学生」役の設定)
5. コミュニケーションのプロセスが学習しやすいレポートの書式の工夫
6. コミュニケーションスキル練習の強化
7. SPとの関係づくりの充実(打ち合わせ、連絡・調整、演技の練習等)
8. SPと学生のセッションにおけるファシリテータとしての役割を含む、教員の教育能力の改善

## VII. おわりに

市民であるSPは、大学にとっては外部者であり、授業

表 7 SP の意見

<p>1. 今回の授業の模擬患者役で難しかったこと</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・シナリオも詳しく書かれていましたし、演技のポイントも具体的に書いてあったので、特に難しいと感じたところはありませんでした。SP の年齢や体格がシナリオに近いと、気持ちを入れやすく演じやすいです。</li> </ul> <p>2. シナリオ、フィードバックのタイミング等で、改善を要すると思われたこと</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・特にありません。</li> <li>・看護師役と見学の学生との意見が出尽くした後に、SP のフィードバックできれば、SP の準備も余裕が持てるし、思いの違いも明確になり問題が浮かび上がると思う。</li> <li>・ロールプレイングのやり取りが決めてあることは、わかりやすいと思いました。</li> <li>・フィードバックは、ロールプレイングの相手に対してのものです。なので、看護師役の学生さんは、席に戻らず、SP と対面でフィードバックを受けるようにしたほうが、SP の個人的意見として伝わりやすいと思います。</li> <li>・フィードバックは、何分程度で行うか、どのような視点で行うか (ありのままが良いか) 等、指示があると良かったです。</li> </ul> <p>3. 授業を受ける学生の態度で気になったこと</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学生さんの態度で気になったことは特にありません。熱心にメモを取る態度など、好感が持てた。</li> <li>・学生さんたちの、同僚に対する感想の的確さには感心しました。</li> <li>・当たり前ではあるのですが、看護師役の学生さん達は、見守っている大勢の仲間が気になって集中して役になりきれなかった。</li> <li>・着衣 (ユニフォーム) 等、形から整えると気持ちができると感じます。</li> <li>・学生さんの言葉遣いで、看護師らしくないという意味で気になったものはありました。</li> <li>・コミュニケーションは、家族でも友人同士でもとても大切なものです。日々の生活の中で、頑張っていたきたいです。</li> </ul> <p>4. 教職員の態度や設営などで気になったこと</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・SP とのやりとりについて、細部の打ち合わせが足りなかったと感じました。イメージを確かなものにより、お互いの演技について、もう少しリアリティを持たせたかった。</li> <li>・学生さんを、多くとも 10 人程度に分け、その中で SP を使った実習を行うことは、物理的・あるいは時間的に無理なんでしょうか。1 人でも多くの学生さんに SP (年配の全くの他人) を使った実習を経験していただきたいし、また、多人数の同僚学生の目で実習を行う学生さんの緊張を少しでも減らしてあげたいと思います。</li> <li>・特にありません。回を重ねることにより、意義深い授業となっていくと楽観しております。何より、先生達の学生を思う深い愛情が伝わる授業となりますよう、お祈り申し上げます。</li> </ul>
--

の開示は教員にとっても緊張感を伴う。しかし、「医療を良くしたい」「学生を育てたい」と個人の時間や才能を提供して下さる SP との教育実践は、非常に楽しいものであった。臨地実習よりも安全な環境で、このような学習の機会を学生に提供できたことは、教員としての大いなる喜びである。

今回は、履修した学生の一部及び SP からの意見を基に分析し課題を整理した。平成 20 年度は、演習 1 においては、教室を 6 箇所、SP の人数を 6 人に設定するなどして、全員の学生が SP とのセッションを体験できるよう運営を工夫した。またシナリオは全て「看護学生」の設定とし、学生がより緊張感をもって学習できるよう改善した。

患者との良好な人間関係形成は、実践力の基盤となる事項であり、看護学部教育の目的を達成するために、本科目の果たす役割は大きいと考える。誠意ある態度で人間関係を構築、発展させることのできる看護師の育成に

向けて、今後は他の演習科目や実習との連携を整理し、より効果的な教育実践をめざしたい。

**謝辞:** 授業及び今回の調査に、快くご協力いただいた COML 札幌患者塾 SP の皆様及び学生の皆様に、心より感謝申し上げます。

#### 引用文献

- 1) 清水裕子: 対話力を育てる—模擬患者とのコミュニケーション学習。看護展望 30(12):1328-1334, 2005
- 2) 堀美紀子・松村千鶴・洵江七海子: 模擬患者を活用した教育方法の検討—学生の評価能力の育成に向けて—。香川県立保健医療大学紀要 1:89-96, 2004
- 3) 出原弥和・辻川真弓・本田育美・他: Simulated patient を導入したコミュニケーション演習の評価。三重看護学誌 8:93-100, 2006
- 4) 鈴木玲子・高橋博美・常磐文枝・他: コミュニケーション学習に SP (Simulated Patient) を取り入れた教育技法

- の開発. 埼玉県立大学紀要 4:19-26, 2002
- 5) 澁谷幸・中田康夫・田村由美・他: 模擬患者を導入したコミュニケーション演習の意義—学生を受け止めるための分析をととして—. 看護教育 46(7):574-579, 2005
  - 6) 肥後すみ子・奥山真由美・太湯好子: SP 導入によるコミュニケーション演習に基づく学習効果と教育技法の評価. 岡山県立大学保健福祉学部紀要 12(1):33-43, 2005
  - 7) 肥後すみ子・荻あや子・太湯好子・他: コミュニケーション技術の向上に効果的な授業設計と課題. 岡山県立大学保健福祉学部紀要 13(1):35-45, 2006
  - 8) 荻あや子・肥後すみ子・奥山真由美・他: SP 導入によるコミュニケーション演習が臨地実習に及ぼす影響. 岡山県立大学保健福祉学部紀要 14(1):29-39, 2007
  - 9) 奥山真由美・肥後すみ子・荻あや子・他: SP 導入によるコミュニケーション演習の授業改善がもたらす学習効果. 岡山県立大学保健福祉学部紀要 14(1):81-89, 2007
  - 10) 前掲3) pp.93-100
  - 11) 佐伯晴子: 教師が鍵を握る学生のコミュニケーション—模擬患者の視点から—. 看護展望 30(12):1313-1316, 2005
  - 12) 前掲3) p.93-100
  - 13) 浦川加代子: コミュニケーション技術演習に関する実践報告—第1報—. 三重看護学誌 6:213-216, 2004
  - 14) 關戸啓子: 多職種学生参加によるコミュニケーション・トレーニング—「人間関係論」における取り組み—. 看護展望 30(12):1323-1327, 2005
  - 15) 加瀬田暢子・前田ひとみ・山田美幸・他: 新入看護学生に対する「仲間づくり演習」の評価—エンカウンターとリフレクションの概念を取り入れて—. 南九州看護研究誌 5(1):1-10, 2007
  - 16) 塚原節子・吉井美穂・坪田恵子: 臨地実習前ロールプレイングで高めるコミュニケーション力—看護師・患者・観察者役になった学生の気づき—. 看護展望 30(12):1317-1322, 2005
  - 17) 平賀愛美・布施淳子: 実習前に行うコミュニケーション演習の進め方とその効果. 看護人材教育 4(5):84-94, 2007
  - 18) 岩崎朗子・原田慶子・吉田聡子・他: エンカウンター・グループが看護学生のコミュニケーションの認識に与える影響. 長野県看護大学紀要 8:61-69, 2006
  - 19) 池田紀子・奥野茂代・岩崎朗子・他: 看護基礎教育における「人間関係・コミュニケーション」教育の現状と課題. 看護教育 43(9):802-806, 2002
  - 20) 中堀仁四郎: 自己概念・経験・成長—人間関係トレーニングで起こっていること—. 津村俊充・山口真人編, 人間関係トレーニング—私を育てる教育への人間学的アプローチ—. 京都: ナカニシヤ出版, pp.112-115, 2005

#### 参考文献

- 1) 鈴木玲子: SP 参加のコミュニケーション教育の実践から—必要な準備とフォローについて—. 看護教育 45(10):834-838, 2004
- 2) 俣木志朗: 模擬患者. 高江洲義矩, 保健医療におけるコミュニケーション行動科学. 東京: 医歯薬出版株式会社, pp.109-112, 2002
- 3) 原田慶子: 学生が自分を理解していくプロセス. 日本看護学教育学会誌 14(3):1-8, 2005
- 4) 山本勝則・吉田一子・内海澁: 看護場面における他者理解と自己理解との関連. 保健科学研究誌 1:27-33, 2004